Film Array 髄膜炎・脳炎パネル検査が抗菌薬選択に有用であった髄膜炎の２症例

◎塩田 彩花、宮川 大樹[1)]、本田 法子[1)]、林 彰彦[1)]
京都市立病院[1)]

【はじめに】髄膜炎は、脳脊髄液中に細菌、真菌、ウイルスなどにより髄膜に炎症が生じる疾患である。感染症による髄膜炎は、致死率が高く重度の後遺症を残すことがあるため、早期の治療介入が必要となる。今回、当院にて新規に導入した FilmArray 髄膜炎・脳炎パネル（以下、ME パネル）検査を用い適切な抗菌薬選択を行うことができた 2 症例を経験したので報告する。

【症例 1】82 歳、男性。肝臓がんのため当院消化器内科に通院中。受診日の道中で転倒し、当院に救急搬送された。当初、熱中症疑いで消化器内科に入院していたが、不穏が続き従命が入らないため、髄膜炎・脳炎除外目的に頭部 MRI 検査が施行された。頭部 MRI 検査で両側の背側優位に白質の低吸収化を認めたため、髄液の塗抹・培養検査、及び ME パネル検査等が依頼された。提出された髄液は淡黄色で軽度の混濁を認め、グラム染色では複数のグラム陽性桿菌を認めた。また、同時に行われていた ME パネルでは *Listeria monocytogenes* が検出された。検査結果を医師に伝えたところ、患者に ABPC の投与が開始され、脳神経内科へと転科となった。

【症例２】67 歳、女性。視神経脊髄炎のため当院の脳神経内科、甲状腺機能低下のため当院の代謝内科に通院中。起床時より様子がおかしく、会話困難などの症状が出現し家族が様子を見ていたが、症状が改善しないため救急要請。精査目的で提出された髄液は無色透明、細胞増加は乏しいが糖低下が著明であったため、細菌性髄膜炎として VCM、CTRX、ABPC にて治療が開始された。その後、細菌検査室にて行われたグラム染色では明らかな菌体を認めなかったが、同時に実施した ME パネルで *Cryptococcus neoformans* が検出された。検査結果を医師に伝えたところ、抗菌薬が L-AMB へ変更された。

【まとめ】今回、ME パネルを用いたことにより迅速に起因菌を検出でき、適切な抗菌薬選択に貢献することができた。FilmArray は手技も簡便であり、特別なトレーニングを行うことなく検査することができるため、夜間休日の救急患者等に実施することで、早期の治療介入が可能となることが期待できる。

連絡先：京都市立病院臨床検査技術科
075-311-5311 (内線：2288)